

令和7年度研究主題

学ぶ意味を子供が実感する国語科の授業づくり

－ 子供の「やりたい」と「分かった」が高まる国語科単元の工夫 －

1. 研究主題について

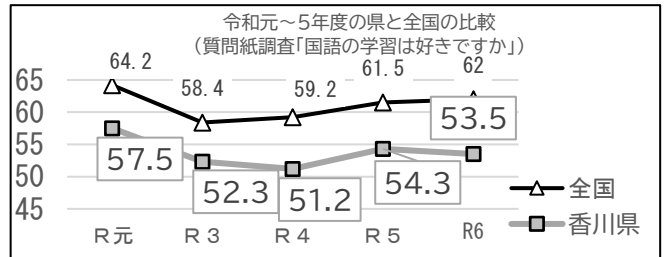
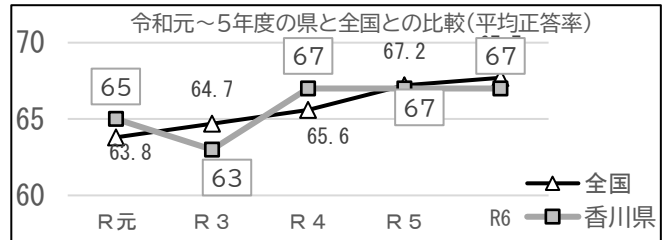
(1) 香川県の子供たちの状況から

これまでの本県の全国学力・学習状況調査の結果の推移は右図の通りである。令和6年度に実施された全国学力・学習状況調査の小学校国語についての正答率は、67%（全国67.7%）であり、昨年度と同様に全国平均と同程度の結果となった。

また、質問紙調査における「国語の勉強は好きですか」という項目における本県の肯定的な回答の割合は右図の通りである。香小研国語部会として課題に挙げてきた「国語の勉強は好きですか」という質問項目について、本年度の肯定的回答の

割合は令和4年度の51%から増加傾向にあり、これまでの国語部会員の先生方を中心とした日々の取組の成果が伺える。しかし、その割合は依然として高くはない。この「国語を好きではない」と感じている子供たちに、「国語っておもしろい」「国語を学びたい」と意欲を高めさせることができれば、より主体的・対話的で深い学びを進め、その結果、国語科の資質・能力を育てることができると考える。

そのためには、これまでの成果を活かし、国語を学ぶおもしろさや楽しさを感じさせながら、自らの成長を実感し、国語を学ぶ意味を子供自身が感じられるような授業づくりを行っていくことが重要であると考えます。



(2) 昨今の国語科教育の情勢から

令和7年1月に行われた「第1回、教育課程企画特別部会」で示された資料の中では、現在の学校教育における課題として、以下のように述べられている。

一方で、様々な課題も顕在化していることに目を背けるわけにはいきません。

一点目として、学ぶ意義を十分に見いだせず、主体的に学ぶに向かうことができていない子供が多くなっています。(中略) これらに正面から向き合うことは、我が国の社会及び教育の積年の課題でもある「正解主義」や「同調圧力」への偏りから脱却するとともに、民主的かつ公正な社会の基盤として学校を機能させ、社会の分断や格差の拡大を防ぎ、共生社会を実現する観点からも極めて重要です。

二点目として、習得した知識を現実の事象と関連付けて理解すること、生成AIは扱えない概念としての知識の習得や深い意味理解をすること、自分の考えを持ち、根拠に基づいて他者に明確に説明すること、自律的に学ぶ自信がある生徒が少ないこと等に依然として課題が見られます。

「子供が学ぶ意義を見いだせておらず、その結果として主体的に学びに向かうことができている子供が多くなっている」ことが指摘されている。これは、日々の学習の中で教師からの提示による学習活動や目的意識のない学習活動が子供の意欲を下げ、主体的に学びに向かおうとする態度の育成を阻害していることを示唆している。子供の主体性を高める上で、「どうして今日の学習をする必要があるのか」、「今日の学びは何につながるのか」、などを子供と共有し、自覚できるようにすることが重要であるといえるだろう。そうすることで、よりよい考えの形成に向けて自分の考えを吟味したり、試行錯誤したりする必要感が子供たちの中に生まれ、国語科の資質・能力も伴って高まっていくと考える。

（３）これまでの研究の成果から

昨年度に開催した夏季研修会では、大妻女子大学家政学部教授である樺山敏郎先生から『学びの文脈を創る国語科授業の創造 ～ラーニング・マウンテンの活用～』と題し、「教師の教えたことを子供の学びたいことへ」という信念の基、子供たちと単元の目標、解決したい問いを共有し、設定すること、それに向けて必要なプロセスを可視化することの重要性についてたくさんのご示唆をいただいた。目標と学習過程を子供と共有することより、子供たちが学習の方向性を見通し、課題解決前・中・後の各段階の自分たちの活動を振り返ることで、目標を常に意識しながら最後まで粘り強く学習に取り組み、自らの学びを調整していこうとする態度の育成につながるということが分かり、今後の授業改善の視点が明らかとなった。

また、同会におけるアンケートには、研究主題について「子供たちが学ぶ意味を実感することは、国語科だけでなくすべての教科で大切にすべき、重要なテーマだと感じた」「示されているポイントが教師主導の学習から子供主導の学習に変えていく上で大切なものであると感じた」「テーマ、及び目的や手段が明確で授業づくりを行う上で授業改善を行っていききたい」「これを国語部会以外の先生方にも広げていきたい」といった前向きな意見もいただいた。

以上、これまでの研究の成果に踏まえ、昨今の国語科教育を取り巻く子供たちの現状を鑑みた時、子供自身が１時間、１単元の学びを何のために行っているのかを自覚しながら学ぶことは引き続き重要であり、香川県の子供たちに必要な視点であると考え。国語を学ぶ意味を感じるとともに、言葉による見方・考え方を働かせながら、国語科の資質・能力を高めていくことができると考え「学ぶ意味を子供が実感する国語科の授業づくり」を研究主題として継続し、その実現に向けて研究を進めていきたい。

（４）学ぶ意味を実感することについて

「学ぶ意味を子供が実感する」姿とは、子供自身がその単元で身に付けたい力や達成したい単元の目標を意識しながら、話すこと、聞くこと、書くこと、読むことなどの学習活動に主体的に取り組み、友達と協働しながら、見方・考え方を働かせて課題の解決に向かっていくとともに、解決後には、付けたい力が身に付いてきたことを感じたり、当該単元で身に付いた力を、新たな問題の解決に生かしたりしながら、国語の学習のおもしろさや楽しさ、大切さを実感していく姿である。子供たちが国語を学ぶおもしろさ、楽しさ、大切さを実感していくような授業が実現すれば、それは同時に子供たちが本当に解決したい課題が位置付き、国語科の見方・考え方を働かせながら解決に向かい、その過程で必要感をもった対話が行われ、自分が納得した考えをもてるようになるはずであり、国語科で目指すべき資質・能力を育成することができるだろうという仮定の基に設定した、本研究で目指す姿である。

2. 研究副主題について

研究主題に設定したような、子供が国語のおもしろさや楽しさ、大切さを感じながら国語科の学習に主体的に取り組む、自分の成長を実感できる授業を目指す上で大切にしたいのが、授業内における子供の「やりたい」「分かった」という思いである。子供がその時間の国語科の授業を学ぶ意味を感じ、主体性を発揮しながら、言葉による見方・考え方を働かせ、課題解決に取り組んでいる教室では、子供の「やりたい」という思いと「分かった」という実感が溢れているだろう。そこで、主題に掲げる授業の実現に向け、研究副主題を「子供の『やりたい』と『分かった』が高まる国語科単元の工夫」と設定した。

本研究における子供の「やりたい」と「分かった」とは、以下のような姿を想定している。

「やりたい」

…その単元や、一単位時間の学習に対しての「おもしろさ」を感じ、興味・関心を高めていたり、明確な目標に向けて、その学習を行う「必要感」を感じたりしている姿。

「分かった」

…その時間の課題に対して、自分なりの納得解を見付けたり、課題解決後に、分かったことやその理由など、学びの成果を捉えたりしている姿。

※必ずしも課題解決ができたことのみを指すのではなく、「うまくいかなかった」ことや、その理由について捉えている様子も含む。

その学習に対してのおもしろさや、必要感を感じ「やりたい」という思いが高まることで子供は、自ら教材や他者へと働きかけながら、その課題解決に向けて言葉に着目し、粘り強く取り組んでいくだろう。そのように1単位時間の学習が充実することで、自らの学びの成果を振り返る際に、「分かった」という思いが高まり、見方・考え方を働かせることのよさや、その学習を行うことの意味を感じる。そして、次にすべきことが見えたり新しい疑問が生まれたりすることで、次の学習に対する「やりたい」という思いが高まり、単元のつながりが生まれていく。このように、一単位時間、一単元の入口と出口における意欲の高まりが、学習効果を高め、子供たちが学ぶ意味を実感しながら、国語科の資質・能力を高めていくことにつながるのである。

3. 授業づくりの視点

ここからは、主題・副主題で述べた子供の姿を実現するための授業づくりの方向性について述べる。本年度の研究の方向性としては以下の3点を想定している。

- (1) これまでの研究の成果の着実な「実施」と「浸透」
- (2) 子供の主体性を発揮させるための「単元構成の工夫」
- (3) 一時間の学びの質を高めるための「自己を見つめさせる支援の充実」

(1) これまでの研究の成果の着実な「実施」と「浸透」

これまでの研究で、その単元における重点指導事項を基に、付けたい力を明確にすることや、付けたい力に合った言語活動を充実させることの重要性は明らかとなっている。また、子供に学ぶ意義を感じさ

せ、「やりたい」思いを高めることにもつながる。そこで、これまで国語部会員の先生方とともに研究を進め、効果が明らかになってきた研究の視点については、国語科の授業づくりを考える上での土台として着実に実施していくとともに、国語部会員以外の先生方にも取り組みを紹介しながら香川県の子供たちが国語を学ぶ意味を感じられるようにしたい。以下に、これまでの研究主題・研究副主題の変遷を示す。

【表1 これまでの香小研国語部会 研究主題・研究副主題一覧】

	研究主題 —研究副主題—
R 4 ～R 6	学ぶ意味を子供が実感する国語科の授業づくり —付けたい力を身に付けさせるために、自己を見つめることを促す—
H30 ～R 4	児童が自ら学ぶ国語科学習の展開 —付けたい力を明確にし、その力につながる子どもの「関心」を高めたり「自信」をもたせたりする授業づくり—
H27 ～H29	ともに学び合い、一人ひとりの考えを深める国語科学習の展開 —子供の関わりを促す支援の工夫—
H24 ～H26	実生活で生きて働く力を育てる国語科の学習 —単元を貫く言語活動を充実させる学習の展開—



↑ QR コード

※ 具体的な研究の視点については香小研国語部会HPを参照

→ <http://www.kasyoukenkokugo.jp/kenkyukatudo/shudai/kenkyushudai.html>

（２）子供の主体性を発揮させるための「単元構成の工夫」

子供が本単元の目標や、本時の活動に対して「やりたい」という思いを高めるためのポイントとしては次の２点であると考ええる。

- ① 教材や付けたい力との出合わせ方の工夫
- ② 学習過程の明確化、共有

① 教材や付けたい力との出合わせ方の工夫

単元の学習を始める際、子供の頭の中はどのようなになっているだろうか。例えば教師から、「今回の単元では、文章を読んで分かったことを基に、音読発表会をしましょう」などと、その単元のゴールとなる目標や、「今日は物語を場面に分けましょう」など、その時間に行う課題や活動を提示した場合、そこに子供たちの思いはなく、なぜ音読発表会を行うのか、なぜ場面分けをしないといけないのか、納得感のない「やらされる活動」になってしまうだろう。すなわち、学習者である子供がその学習に向かう価値を感じられるように、教材や付けたい力との出合わせ方を工夫することが必要である。

ここでは、動機づけ研究の一つである「課題価値理論」を基に、教材や付けたい力との出合わせ方について工夫を考えていきたい。

近年の動機づけ研究の理論の1つに、課題価値理論 (task value theory) があげられます。これは、児童生徒にとって、その課題を学習することが、どのような意味や価値をもつものかという観点から、課題のもつ複数の価値の側面を提起し、学習行動や成績など学業成果への影響を検討したものです。その側面とは、課題を行うことによる面白さや楽しさを感じるという興味価値、課題の遂行が望ましい自己イメージをもたらすという獲得価値、課題の内容が自分の将来やキャリア、あるいは身のまわりの生活に役に立つという有用性価値、そして課題を行うことで生じる負担感を表すコストの4つです。

(自己調整学習研究会『自ら学び考える子どもを育てる教育の方法と技術』、北大路書房、2016年、94頁)

上述されているように、子供は「目標（課題）等そのものが知的におもしろい」(興味価値)と感じた時、「目標（課題）等を達成することが自分や社会にとって役立つ」(獲得・有用性価値)と感じた時に、その課題を学習する価値を感じるということである。

また、「興味価値」に働きかけるには、①これまでに考えたことがなかった、など「新奇性」を感じさせること、②一つの課題に対して、AともBとも考えられそう、といった「多様な考え方」ができることを感じさせること、③分かりそう（できそう）で、分からない（できない）、もう少しで分かりそう、などといった適度な困難度を感じさせることが有効であるとされている。

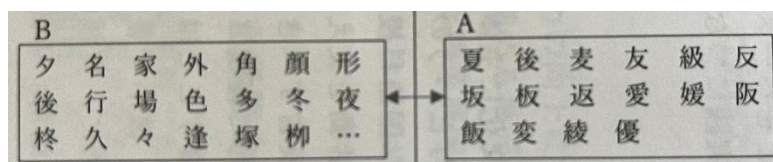
6年生『海のいのち（東京書籍・光村図書）』を用いた実践事例を述べる。本実践では、読書をするこの意味を子供たちと話し合い、「物語を読んで考えたことを、自分のこれからに生かせる」というよさを共有した上で、既習の『お手紙』を読み、物語から感じたメッセージを伝え合う活動を設定した。すると、短く、かつ平易な内容であっても「相手のために力を使うことのすばらしさ」「思い切ってチャレンジすることの大切さ」など、多様な考えが現れた。これらを共有することで、一つの物語から、多様なメッセージを受け取ることができることを感じた子供たちは、もう少し長い物語だと、もっと多様なメッセージを感じることができるかもしれないという興味価値を感じ、「物語から受け取ったメッセージを交流する『海のいのち座談会』をしよう」という単元のゴールを設定した。

また、4年生『意見文を書こう（東京書籍）』を用いた実践例を述べる。本実践では、単元の導入において、「来年度の学校紹介のポスターについてどちらがよいか選んでほしい」という校長先生からの依頼を直接受けるという場を単元の導入で設定した。自分たちが6年生になった時のペア学年になる入学予定児童に向けて発信するポスターということもあり、子供たちはどちらのポスターの方がより入学への期待が高まるか、ポスターの中身を詳しく比較していくことや、意見文の書き方を学ぶことで自分の思いをしっかりと校長先生に伝えることができるという獲得・有用性価値を感じ、単元の学習への意欲を高めていった。



書写の授業における4年生の実践事例を紹介する。本実践では、「左払い相互の方向とその組立て方を理解し、形を整えて書くこと」という目標に向け、単元の導入において、左払いのある漢字を集め、それを二つに分類するという活動を設定した。子供たちは教師が分けていくグループを見ながら、これまでに意識していなかった左払いの違いに

ついて「終筆の位置」「並び方」「長さ」「感覚」などに着目しながら比較し、どのような違いがあるのか興味を高めて



いくとともに、本時の課題を解決することで、「自分もクイズを出せそう」「自分がきれいに漢字を書くために生かせそう」と**獲得・有用性価値**を感じていた。

この際、すべての価値を感じさせないといけないということではなく、教材と指導事項、そして目の前の子供たちの実態から、一番「やりたい」と思える活動や出合わせ方を考えていくことに留意したい

② 学習過程の明確化、共有

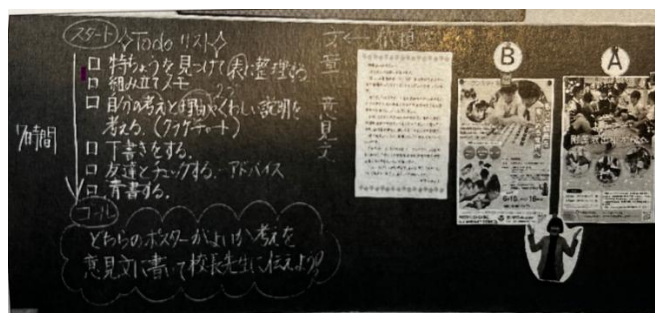
令和6年11月に行われた小学校及び中学校各教科等教育課程研究協議会において以下のような協議題が提示された。

・「単元の計画」で散見される「単元の見通しをもつ」「学習計画を立てる」という文言について
→ この部分はどのように行われていますか。

資料では、この部分が主体的な学習となるために極めて重要である、と続く。昨年度夏季研における樺山氏の講演でも、学習のプロセスが見える化・共有し、子供の学ぶ文脈を創ることの重要性が示唆された。つまり、単元のゴールに向けてつながりのある学習活動を配置することを意識するとともに、それを子供と共有していくことが学ぶ意味を子供が実感する上で重要であると考え。そこで、一単位時間ごとのつながりのある学習計画や見通しを子供と共に作成し、それを共有することを大切にしたい。

例えば、読む領域においてよく行われる「場面分け」について考えてみる。教材文を一読した後、教師から「物語を場面ごとに分けましょう」と提示したとしても、子供たちは、なぜ場面に分けるのか、それによってどんなよさがあるのか捉えられていないだろう。「物語を劇にして、入学してきた1年生に見せよう」という単元のゴールを設定した場合、その達成に向けて何を行う必要があるか、子供に問うことが大切である。それにより、「どんなお話か読まないといけない」「誰が出てくるか見付ける」「何幕に分ければよいか考える」「お話を詳しく読んで、人物の気持ちを考えたい」など、各学習過程と単元の目標とのつながりを意識し、必要感のある学習を配置しながら学習計画を立てていくことができるのである。もちろん、学習経験が少ない子供たちにとって、必要な学習を考えることが難しい場合がある。大切なことは、1時間ずつの授業を行う納得感である。そのため低学年では、はじめは教師が必要な学習と、なぜその学習が必要なのかを説明しながら考えていくことも考えられるだろう。

先程示した、4年生『意見文を書こう』の実践では、「どちらの学校紹介のポスターがよいか考えて、意見文を書いて校長先生に伝えよう」という

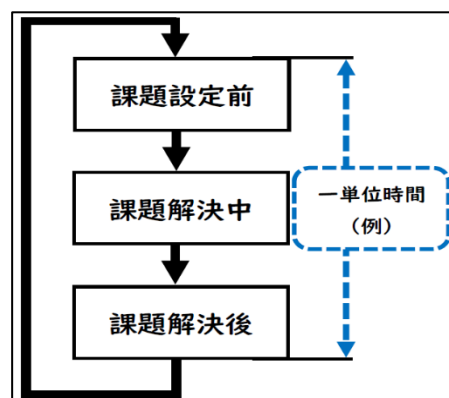


ゴールを設定した。その後、子供たちと必要な学習について話し合う場を設定し、「二つのポスターの特徴を整理する」「どちらのポスターがよいか、理由を考える」「考えを伝えるために組み立てメモをつくる」「メモを基に下書きをする」「校長先生が納得する意見文になっているかチェックする」「清書する」といった学習の計画を子供と共に立て、共有した。

（３）自己を見つめさせる支援の充実

前回研究から、学ぶ意義を子供が実感するために、自己を見つめさせる支援を行ってきた。県内の各校の先生方により、子どもが一時間の授業を行う必要性や、課題解決に向けた自身の考え、その時間の成果などそれぞれに目を向けながら学習を進めていくことで、なぜこの学習を行う必要があるのかを感じられるようにしたり、学習の成果を捉えられるようにすることで、学習を行うよさを感じられるようにしたりできた成果が伺えた。つまり、これらの支援によって子供たちの「分かった」という思いを高めていくことができるだろう。そこで、この視点は前回研究から継続して行っていくこととする。以下はその理論について改めて述べていく。

また、本研究においても、一単位時間をいくつかの場面に分けて考えることで、自己を見つめさせる支援を考えやすいと仮定して、便宜上、三つの場面に分けることとする。小学校の授業では、一つの課題解決に向かう中で、いくつかの学習活動が行われることが多いだろう。自己調整学習の理論を参考にすると、課題に取り組む際の段階として、予見段階→遂行段階→自己省察段階といった表現が用いられている。ここでは、それを小学校教員にとって分かりやすい課題解決を基準に右図のように捉え、支援を考えていきたい。



【授業における３つの場面（深谷，2016を参考に作成）】

① 各場面の目的に応じた支援を考える

この三つの場面には、それぞれ自己を見つめさせることでねらう以下のような目的があることが明らかになってきた。

- ア 課題設定前…本時の学習や課題解決の意欲を高めさせる。
- イ 課題解決中…より納得できる考えをもたせる。
- ウ 課題解決後…自身の取り組み方やその成果に気付かせる。

ア 課題設定前「本時の学習や課題解決の意欲を高めさせる」ために

課題設定前の場面においては、自身が納得した課題を設定できるように支援することを大切にしたい。そのためには、本時の学習課題についての自己の考えを見つめさせる支援を行うことで、子供たちに本時の課題に取り組む意味や価値を感じさせ、課題解決への意欲を高めさせることが必要である。そのため支援としては、自分たちの学習の目的を全体で共有するとともに、これまでの学習の進捗や現在地を確認させることが有効であることが分かってきた。これについては、（２）②学習計画の明確化・共有の手立てと関連する部分が多くあると考える。単元の導入で作成した学習計画を基に、本時どんな学習

をするとよいか、なぜこの学習を行う必要があるのか、について自己を見つめさせたい。

他にも、これまでの学習の成果を想起させることも課題解決の価値を感じさせる有効な支援である。

第2学年の「話す・聞く」領域の実践では、学級会でする遊びを紹介するために、自分のおすすめの遊びの魅力を紹介する「遊びの魅力紹介大会」をすることを言語活動として設定した。本実践の導入では子供たちと一緒に作った学習計画と単元のゴールを確認した後、これまでに活用したワークシートなどを位置付けた図を示し、これまでの学習でどのようなことができるようになったか成功体験を想起させた。そうすることで、「今日、自分たちの遊びの魅力を紹介する順序について考えることで、紹介がもっとよくなりそうだ」など、本時の学習課題を解決することで、単元のゴールに近付くという課題解決の意味や価値を感じている様相が見られた。



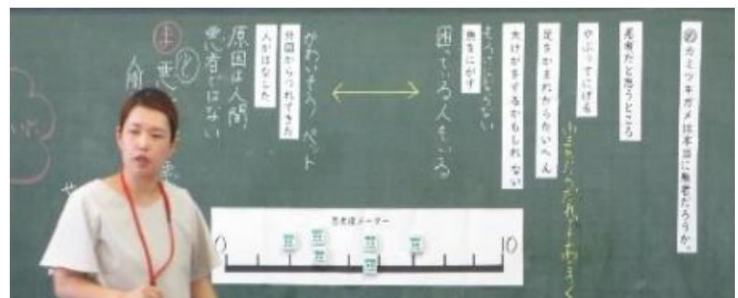
【これまでの学習の足跡を示した図】

イ 課題解決中「より納得できる考えをもたせる」

課題を解決している場面においては、より納得できる自分の考えをもたせることを大切にしたい。そのためには本時の課題に対する自己の考えを見つめさせる支援を行うことで、より納得できる考えに向けて再考させることなどが必要である。自分と友達との考えの共通点や相違点を捉えやすくし、何度も考え直したくなるような学習活動・教具を工夫することが考えられる。

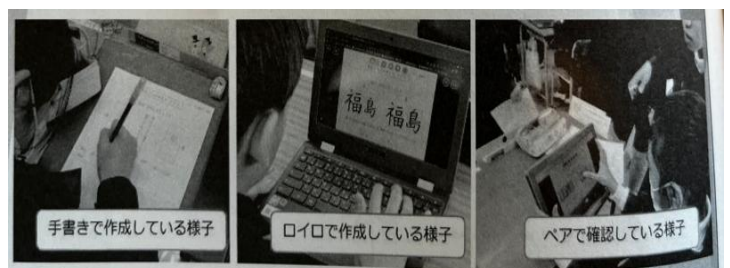
以下に、『カミツキガメは悪者か』（東京書籍3年）を用いた実践例を挙げる。

本単元では、前年度高松支部から提案があった「説明文ハウス」を使い、問いと答えを要約した文を毎時間書き込んでいった。その際、「悪者メーター」を使い、自他の考えの異同が見える化したことで、自分の考えを見つめ直すきっかけを作り、悪者だと思っていたカミツキガメが、本当は自分を守るためにしていたことだと気付いていけるようにした。



【悪者メーターにより、自分の考えを見つめ直す】

また、漢字相互の大きさの関係を理解し、各文字の適切な大きさを判断して示すことを目指した書写の実践では、教師が例示した「香川」「山口」の文字を2パターン見せ、これまでに学習してきた「書写のかぎ（画数の少ない方を小さく）、（囲む形を小さく）」を基に、どちらがよりきれいに見えるか考える時間を設けた。その後、自分たちで名前や地名の熟語を選び、獲得した「書写のかぎ」を意識しながらモデルと同じようなクイズを作成し、互いに解き合う活動を設定した。子供たちは、鉛筆で該当の文字を書いたり、タブレットを使って文字の大きさを調整したり、正解の理由を合わせて考えたりしながら、自分の問題が正しい文字の大きさの関係になっているか何度も吟味する様子が見られた。ま



た友達の作成した問題を解き合うことで、様々な文字の大きさの関係について、見付けた法則が適応できるか再考したりする様子が見られた。

ウ 課題解決後「自身の取り組み方や、その成果を捉えさせる」

課題解決後の場面において学ぶ意味を実感させるためには、自分の成長や頑張りを見つめさせる支援を行うことで、自身の学習への取り組み方や、その成果を捉えさせることが必要である。前教科調査官の菊池英慈氏は、振り返りの意義について次のように述べている。

一般に、学習の振り返りという行為は、学習者自身が学習の節目節目において、学習した内容や活動を想起し、理解したことを整理する学習活動です。そのためには、児童に單元ごとの中でどのような資質・能力を身に付けるか、学習の見通しがもてるようにすることが大切です。

何が分かって、何が分からないのかなどを表現させ、自分自身の学びを自覚させていきましょう。分からないことがあれば調べたり、次の時間に確認したりするようになり、更に成長する機会となります。さらに、振り返りによって、「自分の考えを発言できた」、「次は友達の意見を聞きたい」といった学んだことの充実感、達成感を味わうことになり、それは学習への意欲とつながっていきます。

「資質・能力を育成する小学校国語科授業づくりと学習評価」, 明治図書、2021, 43 頁

このように振り返りを行うことで、自身の理解したことを整理し、学びを自覚させ、学習する意味を感じさせることができるのである。しかし、ただ振り返りの時間をとるだけでは、自身の学びを見つめさせることにはつながらない。客観的に自身の成長や頑張りを見つめさせるためには、「何を」「いつ」「どのように」振り返らせるのかについて工夫することが必要であると考え。

以下に、ア～ウの項立てに即して課題解決後における効果的な支援を考える際のポイントを述べる。

ア 「何を」振り返らせるのか

一言に「振り返り」と言っても、「今日の学習を振り返りましょう」と教師が伝えただけでは、子供たちは、何を振り返ればいいのか混乱するであろう。自身の学習への取り組み方や、その成果をとらえるためには、どのような自分の姿を見つめさせるのかを教師が明確にしておく必要がある。そして、何を振り返らせるかを想定した後、子供がどのような振り返りを書くことを目指すのかを教師が想定し、実際に書いてみることも単元構成や授業づくりの上で大切であろう。

これまでの実践から明らかになってきた効果的な振り返らせる内容を以下に示す。

- a 自分が学習してきた結果や、自己の学びの変容を分析する振り返り
- b 学びの過程（プロセス）を分析する振り返り
- c 次の学習に向けての振り返り

a は、教科の資質・能力としての高まりを捉えさせる観点である。本時の学習を通して分かったことや自身の考えの深まり、また、子供と共有した身に付けたい力について、どのように自身の力が単元前後で高まったかなどについて振り返らせることで、子供が自らの成長を正確に捉えることができるだろう。

b は、自身の学習への取り組み方を捉えさせる観点である。学習への取り組み方とは学習方略全般のことである。例えば「今日は友達と考えを交流したことで、新しい考えを見付けることができた」「一つだ

けでなく、いろいろな観点から想像したから、がまくんの様子がもっと詳しく想像できた」などのように、課題解決できた理由を考えさせるなどすることによって、自身の取り組み方のよさに気付かせることができるだろう。

cは、捉えた自身の成長や頑張りを基に、次にどんな学習をしたいかを見つめさせる観点である。本時の学習の成果が次時以降の学習につながっていることに気付くことで、本時学習したことの価値をさらに感じることができるだろう。また、新たに必要だと感じた学習を追加したり、もう少し本時の学習に時間をかけたいと感じたりすることで、学習計画を見つめ直し、修正することも起こりえるだろう。

振り返りを行う際、上手いかなかったと感じている子供に対しても、どうしてそう思ったのか理由を考えさせ、次の取り組み方の目標を教師と共に立てることで、本時の取組を前向きに捉えられるようにすることも大切にしたい。

以上の理由から、課題解決後の場面では、上述した三つの視点についての振り返りを促していきたい。

イ 「いつ」 振り返らせるのか

国語科の特質として、各領域の指導事項に沿って学習過程が進んでいくことが挙げられる。例えば「書く」単元の領域では、重点指導事項が「ウ：考えの形成」であっても、そのために「ア：題材の設定、情報の収集、内容の検討」が行われ、集めた材料を基に「イ：構成の検討」を行い、「ウ：考えの形成、記述」をしていくだろう。その後、「エ：推敲」を行い、互いに紹介を聞き合い「オ：共有」することも考えられる。その中には、「知識及び技能」の習得をしていたり、「学びに向かう力、人間性」を発揮したりしている時間もあるはずである。そのように単元が進んでいく中で、必ずしも毎時間、授業の最後に同じような観点で振り返りを行うことが適当でない場合も考えられる。本時のねらいに即して、アで述べた三つの視点のうち、何についての評価を促すのか教師が明確にもち、適切な時間に配置し、単元をつくっていききたい。

ウ 「どのように」 振り返らせるのか

アで述べた視点について、効果的に振り返る方法は、領域や指導事項の特性、教材の特徴、子供たちの発達段階や言語活動、本時の学習活動などによって多様にあると考える。

例えば、2年生の実践では、「読む」領域において、学びを深めるために必要な学び方を「読みの技」として、一年間の国語科授業の中で蓄積していき、子供と共有した。そして振り返りでは、それらの学び方が使えたかどうかについて振り返る時間を設定し、自分が該当の技を使えた、と感じた時にはその日付を記録していくようにした。また、このシートは年間通じて同じシートを継続して使った。それにより子供たちは、自分がどのような学び方ができたのかや、得意な学び方や苦手な学び方を自覚し、次時の学習へ生かしたり、自身の変容を視覚的に捉え、自らの成長を感じたりしている様子がうかがえた。

このように、単元や、本時の学習の特徴に合わせて効果的な振り返りの方法を考えていくことで、より

読みのわざ  リスト		名前()									
7	「もし、～だったら」と考える	7/14	7/14	9/16	10/17	10/18	10/21				
8	図やしゃしんと 文しょうをつなげる	7/14	7/15	10/17							
9	どうして そうしたのか りゆうを 考える	9/14	9/15								
10	大事なことばを さがす 【せつめい文】	10/17	10/18	10/21							

【読みの技チェックリストの一部】

自身の学びの成果や頑張りを見つめさせることができるのである。

4. 今年度の研究の重点

最後に、これまでに述べてきたことを踏まえ、令和7年度研究の重点をまとめる。

- 子供たちの「やりたい」という思いを高めるために、単元導入時の教材や付けたい力との出合わせ方、学習過程を共有するための効果的な方法について探る。
- 子供たちの「分かった」という思いを高めるために、自己を見つめさせる効果的な支援の在り方を探るとともに、その支援を充実・浸透させていく。
- 学ぶ意味を子供がより感じられるように、学習を通しての自身の成長や頑張りを見つめさせるための効果的な振り返りの支援の在り方を探る。